

キリスト教布教に対抗する「権力正統化装置としての神楽」 試論的研究(2)

キリスト教受容と大航海時代・近代世界システム

吉 居 秀 樹

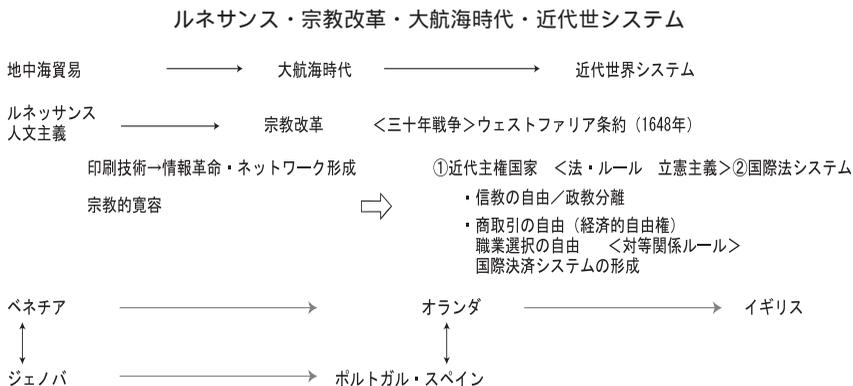
1. はじめに キリスト教受容と大航海時代を考える視点
- 2 近代ヨーロッパ 印刷革命(情報革命)としての宗教改革・人文主義と主権国家
- 3 大航海時代・近代科学革命・近代世界システム
- 4 むすび

1. はじめに キリスト教受容と大航海時代を考える視点

本研究に先行する論考⁽¹⁾において、わが国、とくに長崎県北地域におけるキリスト教の受容過程を考察する際に、丸山眞男の指摘を引用して、キリスト教の受容がそれ単独ではなく、近代の科学技術に繋がる新しいテクノロジーと共にもたらされたものであるということを確認した上で、以下の認識を示した。それは、キリスト教をもたらしたヨーロッパ側の研究の表現を借りれば、「大航海時代」とともにもたらされたものであり、いわゆる近代世界システムないし近代主権国家の成立とそれを基本単位とする国際法システムの形成とも重なり合う。そのことは、これらの動きに主導的役割を果たし覇権を有した国家が、ポルトガル・スペインからオランダさらにはイギリスへと移行する過程でもある。このような視点から、より

広い文脈において、わが国におけるキリスト教の受容の状況を考察することの必要性を述べた。以下に、前稿で述べた諸関係をマトリクスとして示しておく。

本論文では、これらの諸要素の内容及びそれらの関係をより詳しく明らかにし確認することを目的とする。



本稿の関心方向にかかわるが、19世紀における近代科学および科学技術のヨーロッパからのわが国への本格的導入ないし摂取に関する科学史の領域の著書において、渡辺正雄は、近代科学とキリスト教の関係について以下のように指摘している⁽²⁾。

渡辺正雄は、「近代科学と科学技術が宇宙的な有効性をもつことは、今日では誰の目にもあきらかである。しかし、このような近代科学が生まれたのは十六、七世紀のことであり、近代科学と結びついた科学技術がきわだった有効性を発揮しはじめたのは、一九世紀以降のことである。しかも、まず西洋文化圏においてであった。・・・この近代科学の方法は、やがて力学以外の領域にまでも成功裏に進められていて、光、物質、生物、熱、動力、電気、電磁気などの諸分野に及んだ。それが近代技術と結びつくと、科学、技術ともに加速度的な進展を示し、文字通り『科学は力である』と云いうる時代が到来した。一九世紀である⁽³⁾」という一般的認識を示した

上で、わが国が「近代的な国家・社会の体制を確立し、またそれに不可欠な西洋の科学技術を摂取する必要に迫られ」と指摘する。しかしながら、この近代科学の理解には「総合的視野」が必要であることを強調する。すなわち、「近代科学は・・・人間の知的・精神的営みの一種である。・・・それはいかなるいとなみであるのか、どのようにして創り出されていくものか、それと人間・文化・社会との関係がどのようになっているのか。このようなことが理解されない限りは、近代科学は理解されたとは言えない⁽⁴⁾」と。

ではいかにして近代科学はヨーロッパにおいて成立することができたのであろうか。「西洋の伝統的な世界観・自然観は、何よりもまず神を基本とし、出発点にしている。・・・ここで神というのは、言うまでもなくユダヤ・キリスト教の神である。この神は、A・N・ホワイトヘッドも指摘しているように、絶対の権威であるとともに、首尾一貫した合理性をもつ人格的な神である。気まぐれな専制君主のような、専断的で非人格的な神ではない。・・・西洋の伝統的な世界観・自然観は、このようにして、自然を客体的に見、客体的に取り上げるという基本的な態度を確立させ、その自然の中に一定に秩序があることを確信させ、それを見いだす努力に対して有形無形の宗教的是認と鼓舞を与えるという役割を果たしてきたのである。まだ近代科学の成立を見なかつたころ、すなわち、まだそのようなものが成立しうるか否かさえさだかでなかつたころ、まして、科学者という職など考えられもしなかつた時代に、それでも自然の研究に立ち向かつて、ついに近代科学の成立をもたらすことを可能にした人々は、おおよそ右のような世界観・自然観に導かれて活動したのである⁽⁵⁾」。

このような「近代科学は、誰に対しても、いつどこへもっていても通用するという性格のものである」が、それは、上記のような「西洋の世界観の所産である」。

「従来、西洋における中世と近代の関係については、啓蒙主義的な見方のもとに、中世はいわば、なくもがなの『暗黒な』時代であって、中世を

脱却することが近代であり、脱中世の輝かしい成果が近代科学であるというふうを考えられがちであった。・・・ところが、最近の資料的・歴史的研究は、こうした近代科学観とニュートン像をくつがえした。そして、むしろ、近代科学が中世西洋の思想的・宗教的伝統と接続する面が重要視されるようになった。近代科学の創始者たちが中世の神学者と自然哲学者に負うところがいかに多いかが再認識されるようになった。つまり、近代科学が、西洋固有の知的・精神的伝承としての近代科学としてとらえなおされるようになった⁽⁶⁾」。

これらの指摘には多くのことが含まれるが、16世紀～17世紀におけるわが国におけるキリスト教の受容過程およびそのことに対するわが国の対応に関する研究をしようとし、キリスト教をもたらしたヨーロッパ側の状況について見る場合には、キリスト教と近代科学の成立との関係をも視野に入れることの必要性が示されている。この文脈において、2011年に刊行された西洋哲学史の神山繁による「序文」は、本研究にとって示唆的である⁽⁷⁾。長文となるが以下に引用する。

この国に、『哲学』がその訳語名そのものを含めて本格的に導入されたのは、明治維新の欧化政策にともなうものであることは言うまでもないが、実際の出会いはそれより三〇〇年も前、一六世紀末のイエズス会による日本布教の一環としてであった。記録に残っているところでは、一五八三年に豊後の府内（現在の大分市）にあったコレジオで、来日したばかりのペドロ・ゴメスの指導のもとで哲学の講義が初めてなされたともことである。講義を受けたのは五名の宣教師の卵たちで、教科書は当時ヨーロッパのイエズス会の学校でも用いられていたトレトゥスのラテン語によるものだったという。

ペドロ・ゴメスはスペイン生まれのイエズス会士で、ポルトガルのコインブラ大学で哲学や神学を教えた経験をもち、後期スコラ学派のフォンセカを中心とするアリストテレスの注解作業にも従事してい

た。そうした一般の人物が東洋の宣教にどうして加わったのか、布教の熱意ということはもちろんだが、彼が『マラーノ（改宗ユダヤ人）』だったことは見逃せない。十六世紀半ば以降スペインではマラーノを公職から排除するいわゆる『血の純血規約』が強化され、これが一五八〇年のスペインによる併合以来ポルトガルに適用されたことも重なって、東洋に布教に来たイエズス会士に同様の事例は少なくなかった。

ゴメスが教科書として用いたというトレトオス（スペイン語名・トレド）とは、スアレスや先のフォンセンカと並んで後期スコラ哲学を代表する神学者で、そのアリストテレス注解は当時のイエズス会の学校で広く用いられ、後にデカルトが学ぶことになるラ・フレーシュ学院でも同系統の教科書が用いられていた。そして、それから十年後の一五九三年に、ゴメスはより簡便な『講義要綱（Compendium）』を自ら執筆し、さらに二年後の一五九五年にはその和訳が完成する。これは第一部『天球論』・第二部『魂論』・第三部『倫理神学』の三部構成で、この和訳を使って遣欧少年使節の一員となった伊藤マンショも学んだと伝えられるように、日本人イルマン（修練生）教育にも用いられた。・・・

要するに、キリスト教神学の基礎となる哲学の教育を通して、同時に哲学史の知識がこの国に初めて伝えられたのである。

上の文章は、わが国における16世紀の状況から先に示した渡辺正雄の指摘を裏付けする内容になっているとすることができる。これに続けて、神崎は、上記『講義要綱』の和訳にも携わったと思われる日本人不干斎ハビアンの著した『妙貞問答』の一文がキケロの著作に基づいたものであることを指摘し、「ルネサンスの人文主義の成果として、異教の古典をも取り入れながら布教が行われた様子がわかる」と述べる。このように、「イエズス会の『学事規定（Ratio Studiorum）』では、さまざまな人文書のなかでもキケロが重視されて」きていたのだと言う⁽⁸⁾。

このイエズス会の学事規定については、ジョン・ヘンリー『一七世紀科学革命』の「第3章 科学的方法」の中でも、次のような指摘がみられる。「イエズス会もその積極的な教育活動を通じて自然哲学の数学化に貢献するところがあった。その教育プログラムをまとめたいわゆる『学理規定』の中で数学は重要な役割を果たしている。彼らが数学教育を重視したことは、その教育プログラムにおいて数学が自然哲学や自然哲学や形而上学と並んで最終二学年のうちいずれかで教えられていたことからわかる・・・少なくとも二人の思想家が、イエズス会の学校で学び、その後世界像の数学化に独自の仕方でも貢献した。マラン・メルセンヌ（一五八八－一六四八）とルネ・デカルトである⁽⁹⁾」と。このように、イエズス会の当時の教育プログラムが近代科学の成立に影響を与えたことが示されている。

さらに、ハビアンは、神学や哲学を、ラテン語で学んだ最初の日本人であるとされ、「平家物語」のキリシタン版の著者であることも紹介されている⁽¹⁰⁾。実は、この「平家物語」が、エリク・ド・グロリエによるクセジュ文庫版『書物の歴史』⁽¹¹⁾の見開きの口絵写真（『平家物語抜書』、キリシタン版、文禄元年（1592）刊、（大英博物館所蔵））として掲載されているのは、象徴的である⁽¹²⁾。この『平家物語抜書』は『天草版伊曾保物語』等と合綴されて大英図書館に蔵されているとされるが、キリスト教の受容期に活字印刷が実際にわが国において行われたことを示すものである⁽¹³⁾。

活字印刷ないしその技術は、木版も（金属）活字印刷も中国人及び朝鮮人の発明にかかるものであることは認識されていながらも⁽¹⁴⁾、1450年代のいわゆるグーテンベルクの印刷機の発明をもってヨーロッパ近代の起点のひとつとし、不可欠の要素であると認識されてきており⁽¹⁵⁾、この視点から考察を始める。

2 近代ヨーロッパ 印刷革命（情報革命）としての宗教改革・人文主義と主権国家

前稿において、キリスト教の宗教革命に続く三十年戦争の結果であるウェストファリア条約が、現代の国際関係の基本単位である近代主権国家の成立の起点であること、そしてそこでは、信仰の自由、商取引の自由の保障が約されたことについて指摘した。ウェストファリア条約によって、その成立に重要な役割を果たしたネーデルランド北部七州（オランダ）もスイスとともに独立が正式に承認されている⁽¹⁶⁾。

このことから、近代国家の成立とマルチン・ルターの「95ヶ条の論題」（1517年）に始まるとされる宗教改革との関連性が確認される。小泉徹は、宗教改革と主権国家との関係について、次のように述べる。「ルターが『九十五ヶ条の論題』を発表するのに先立つ四〇年あまりのあいだに、ヨーロッパは一つの転換期をむかえていた。それを一言でいいあらわすならば主権国家の出現ということができるであろう。・・・十六世紀初頭には、イングランドとフランスが主権国家としての体裁を整えはじめていたのにたいし、ドイツでは領邦が主権国家の役割を果たすことになった⁽¹⁷⁾」。そして同時に、主権国家が成立する際に、一つの領土における最高の権力者（主権者）である王権が、領土内の政治的権力者である封建領主と領土外でのローマカソリックの普遍的権威否定なしは対抗する必要性から王権神授説が主張されることになった。すなわち、「こうしてローマ・カトリック教会から離れた君主たちは、宗教上の問題についてはプロテスタント神学者に頼っていたが、世俗の事柄にかんして理論的拠り所としたのが、『王権神授説（神授王権説）』であった。従来、世界史の教科書などでは王権を絶対化するための反動的な思想として説明されてきた。しかし王権神授説がもっていた意味は、主権国家の王権（権力）は、ローマ教皇という媒介者をへずに『直接に神に由来する』というところにあった。中世的王権の観念によれば、・・・王権は神からローマ教皇の手をへて国王にいた

るものであった。この観念のもとにあったがゆえに、中世の世俗の支配者はつねに教皇権との闘争をよぎなくされていた。聖職叙任権闘争は、そうした争いのハイライトにはほかならない。王権神授説はそうした観念を明確に否定し、主権国家の独立性を王権の擁護というかたちで表現したのである⁽¹⁸⁾。

王権神授説によらない国家主権の正当化が「社会契約説」であるが、1689年のイギリス名誉革命を正当化したジョン・ロックの『統治二論』の前半部分が、当時の代表的な理論であったロバート・フィルマーの王権神授説の批判・否定にあてられていることは、この証左である⁽¹⁹⁾。このことは、近代主権国家が、その内部に、その権力（主権）の正統化の論理を準備することが必要とされたことを意味する。宗教改革と統治権力の正統化の問題との関連性ということができる。

さらに、木版印刷から活字印刷までの宗教改革への影響を論じた研究において、森田安一は「書籍印刷なくして宗教改革なし⁽²⁰⁾」と端的に指摘する。また、主権国家の成立の起点をなす宗教改革を考察する視点について、小泉徹は、「そもそも宗教改革それ自体が、グーテンベルクによる活版印刷術と、それにとまなう出版物の増加、読書層の拡大という自体を抜きにして考えることはできない。簡便な印刷術がなければ、聖書を大量に普及させることはできなかつたし、聖書を普及させるため各国語に翻訳することも考えられなかつたであろう。また、読み書きの有無によって、社会が階層化することもなかつたであろう。宗教改革は十六、七世紀における情報革命の申し子であった。宗教改革全体を、印刷物という新たなメディアを利用した精神世界における主導権争いとみることもできる⁽²¹⁾」と述べており、共通した理解が示されている。

ここで言う「活字印刷術」の特徴は、母型に基づく「鉛鑄造の可動活字、油性印刷インキ、木製の平圧式印刷機といった一群の新技术⁽²²⁾」からなるが、印刷複写による数百部単位の大量生産を可能にした。この印刷術によって「異なる地域の人びとが同一のテキストを読んだり、同一の図像を

調べることができるようになった」ため、知識の標準化がされることになったとされる⁽²³⁾。それと同時に、この印刷術は「規格化と、分業と、機械化」という近代産業の三つの本質的な性格に基礎を置いており、「資本主義初期の典型的な産業」ということができ、かなり莫大な資本を必要としてきたとされるが、このことから、北イタリアやオランダの商業都市、ライン地方や南ドイツの市の立つ諸都市、ハンザ同盟の諸都市など商業ブルジョアジーが最も強く最も栄えていたところにどこよりも先に植え付けられた」と指摘されてきた⁽²⁴⁾。

最近のルター研究において、この宗教改及び活版印刷と当時興隆してきていた「官僚制」との関係が次のように指摘されている⁽²⁵⁾。「誘拐劇からの一〇ヶ月間、そしてその後の生涯にわたってルターを支持しつづけたのが、ザクセンの宮廷顧問官であった。さきにも書いたように、ザクセン地方はヨーロッパ有数の銀、銅、錫の産地として経済力を強めていた。その管理権を握っていたのが、新興官僚ともいべき宮廷顧問官である。彼らは各種の統計資料を駆使して、いまでいう生産調整や出荷調整も行って、領内の経済力の維持向上に努めた。彼ら新興官僚は、財政と経済の強化を背景に、宮廷内で発言力を高めていた。

宗教改革を単に宗教上の運動としてだけ見ると、その一面しか捉えられなくなる。宮廷顧問官をはじめとする、当時ドイツで勃興しつつあった新たな社会勢力が、一貫してルターとその宗教改革の理解者であり支持者だったことを忘れてはならない。ワルトブルク城での滞在をお膳立てしたのは彼らであり、ルターが必要とするもの、食料はもちろんのこと、書籍、執筆のための大量の紙（当時のヨーロッパでは紙は、分厚く、重く、高価だった）、医療品にいたるまで、いわゆるロジスティックスを担っていたのも彼らであった。」

ここに言う宮廷顧問官についての記述は、中央集権化にともなって興隆してきたされる、マックス・ウェーバーの言うところの「官僚制」の内容に他ならない⁽²⁶⁾。ウェーバーは、官僚制成立が、その前提として貨幣経

済の発達を指摘しているが、同時にヨーロッパにける近代的な団体の諸形態（国家、教会、軍隊、政党、経済経営、利害団体等）の発達と共にあること、そして特に近代主権国家の基本的構成要素であると指摘している。そして、「官僚政による支配」の特徴を、公式の規則と文書による非個人的統治であり、「知識による支配」ないし「知識に基づく支配力の行使」と呼んだ⁽²⁷⁾。このようにルターの宗教改革と近代国家形成期における世俗権力との関係性を見ることができるわけだが、先に紹介したイエズス会が行った哲学に基礎付けられた神学の構築であるカトリック側の宗教改革の内容を踏まえるとき、徳善義和の次の指摘は、本稿に関心にとって示唆的である。すなわち、「中世の神学は哲学から多大な影響を受ける一方、哲学は「神学の端女^{はしため}」であり、神学に従属するものとみなされていた。聖書のことばによって神学を構築しなおす試みでもあったルターの宗教改革は『神学を哲学から開放する闘い』といわれたが、これは裏を返せば、哲学の神学からの解放を意味する。ルターにその意図はなかったものの、宗教改革は、哲学が神学のくびきを脱し、自立した学問に発展していく道を開いたともいえるのである。こうした動きは哲学にとどまらず、宗教改革によって、人間の生の様々な領域で広く脱キリスト教化が進んでいった⁽²⁸⁾」と。

さらに、印刷革命（情報革命）という観点からここで述べておくべき重要な点は、ヨーロッパにおける出版中心地についてである。ピーター・パークは、『知識の社会史』、「第7章知識を売る」⁽²⁹⁾において、「本の出版はそれ自体商売であり、実業家たちの関心を惹きつけた。実業家たちはすでに15世紀には、印刷業者の資金調達を手助けしていた。…印刷が知識の商業化を助長したことである。印刷術のもたらした明白な、しかし意味深い帰結の一つは、知識を広める過程に、つまり『啓蒙の商売』に、起業家がより密接に関わるようになったことである。印刷業者が古典的文献の新版や、翻訳、参考図書を注文することもまれではなかった」と前提となる状況を説明した上で、出版と商業との関係という経済活動の視点から、主要な出

版の三つの中心都市として、16世紀のヴェネチア、17世紀のアムステルダム、そして18世紀のロンドンであるとして取り上げる⁽³⁰⁾。これは、まさに、「近代世界システム」における覇権あるいは中心地の移行と重なっているが、本稿の主たる関心の観点から、これらの都市がヨーロッパにおいて出版の中心地となった背景について、アムステルダム（オランダ）中心に見ていこう⁽³¹⁾。

まず、パークは、17世紀になると、ヴェネチアに代わってオランダ共和国が「他国よりも宗教的多様性を許す寛容さをもつ安全地帯の島」となり、そして「情報の主要な中心地にして主要な市場、ペールが一六八六年に言ったように『総合倉庫』（magasin général）となった。・・・この中心地のさらに中心地はアムステルダム市街であった。かつてのヴェネチアに代わって、一七世紀の後半までには、アムステルダムがヨーロッパの書籍出版の最も重要な中心地になっていた。二七〇以上の書籍商と印刷業者が、一六七五年から九九年までの二五年間にアムステルダムで活躍していた」と述べる。つまり、宗教的寛容さの故に、民族的・宗教的な少数者集団が活躍する場が提供され、その結果、「アムステルダムの印刷業者は、以前のヴェネチア人と同じように、さまざまな言語で印刷することを得意⁽³²⁾」としたとされるのである。スペイン支配下にあったネーデルランド北部七州、そして独立後のオランダへは、カトリックの支配から逃れたプロテスタントのカルヴァン派が多数を占めていたとされるが、このような「多様な民族、宗教、階級などのるつぼとして」の国際都市アムステルダムという性格が「カルヴィニストの排他的情熱を」かなり薄めることになったと評される⁽³³⁾。

このことに相応するかのようには、最近の研究では、ほぼ同じ時期の平戸が「海外に開かれた自由な港市」と呼ばれるとき、上記の事柄は本研究においても意味を持つことになる⁽³⁴⁾。

また、オランダの優位が保たれた理由として特筆されるのが、オランダ東インド会社（VOC）が構築した「情報網」である⁽³⁵⁾。パークは、オラ

ンダ東インド会社が、当時において、情報の商業的価値に気づき、『『多国籍』企業と評され、また、帝国に匹敵するほどの情報に必要な諸装置を備えていた』と言い、他社をよせつけない程の「効果の情報網」が成功の理由であると指摘する。そして、その情報機構において、最も特筆すべきことは、18人委員会宛に送られる一般書簡として知られる「年次報告書」など定期的な文書による報告が重視されていたことであり、その中でも、統計的な形式での商業情報が重視されていたことを挙げている。「市場の売買戦略にとって、情報、とくに統計的情報を、体系的に収集することが重要であるということ、VOCは比較的早くから自覚していたと思われる」とし、「報告書の場合と同じく、統計に対するVOCの関心にもっとも似通った事例は、競争相手となる他の会社とではなく、カトリック教会や中央集権国家に見られる」と評価している⁽³⁶⁾。

1639年に築造され1641年に徳川幕府の命令で破壊された石造り「オランダ商館倉庫」の平戸市における復元(2011年完成)については、発掘調査と共に、会計帳簿(経費明細書)が有効であり活用されたことは、ここで文脈からいって上記のこの意味を裏書きしているように思われる⁽³⁷⁾。

3 大航海時代・近代科学革命・近代世界システム

わが国へキリスト教をもたらすことになった「大航海時代」そして現代のグローバル化に繋がる地球規模での経済ネットワークとされる近代世界システム(=資本主義世界経済)の形成がなぜ可能であったのか。そして、オランダがそこで初期の主導的地位や優位性を有することが出来たのはなぜなのだろうか。本稿の文脈の中で考察しておく。

まず最初に、最近の研究⁽³⁸⁾では、ヨーロッパの側の圧倒的な経済力の下に、それまでバラバラであった世界を一体化したとされる経済ネットワークが形成されたとは考えられていない。15世紀から16世紀当時、ヨーロッパの地中海交易圏の他、東アジア交易圏、東南アジア交易圏、インド

洋交易圏が存在し、これら交易圏は中国商人、インド商人（とくにパルシー商人）、アラブ商人によって担われ、同時に複数の交易圏にまたがる遠隔交易も行われていたとされている。ポルトガル、スペインは、このような広大な地域を軍事的に支配し長期にわたって維持することは容易ではなく、東アジアへの進出にあたっては「独自の歴史的条件に厳しく規定されながら、従来交易圏へ参入する」ことになったとされる⁽³⁹⁾。

日本を含むアジアの視点から言うと、16世紀に至ってイベリア半島のポルトガル、スペイン両国が地球を逆から回ってアジアで出会い、「有機的連環で結ばれた地球規模の『世界』が、ヨーロッパの主導権の下で端的に成立した⁽⁴⁰⁾」ことにより、直接アジアの海に進出してきたということになる。

しかも、16世紀に入るまで、ヨーロッパの東方貿易の実態は常にヨーロッパ側の輸入超過であったとされる⁽⁴¹⁾。アジアの交易圏については、中国が周辺国と朝貢貿易の形をとっており、朝貢品として銀が要求されていた。中国は、生糸、絹織物そして陶磁器の対価として銀の支払を受け、銀を吸収していた。この状況を、デニス・フリンは、16世紀・17世紀「当時、世界最大の銀の供給地はスペイン領アメリカであり、日本はそれにつぐ主要な供給地であった。・・・両地域で産出された銀の多くが巨大な中国大陸へ向かった。・・・中国と同様、インドも大量の銀を吸収していた。スペイン領アメリカで産出された銀は、二つの主要ルートで中国とインドへ向かった⁽⁴²⁾」と指摘する。このように、日本産銀が当時の世界できわめて重要な位置を占めていたことが示めされている。つまり、非常に単純化して言えば、ポルトガル、スペインそしてその後を継いだオランダは、この中国との貿易の決済通貨である銀を求めて、日本へやってきたということになる。そして、同時に、銀を媒介とした当時の日明貿易が、「世界最大規模の2国間交易であった⁽⁴³⁾」とも言われる。この日本側の主要な貿易港の一つが目下の本研究対象の地である「平戸」なのである⁽⁴⁴⁾。

以上のような貿易の内容であったとしても、地球規模での経済ネット

ワークシステムを構築しようとし、それを維持していくには別途理由が必要であろう。当時の思想状況ないしは精神史の研究を参照することにより、これを考察していく。

ジョン・ヘンリーは、上述した、ヨーロッパ側から見た場合の「地理上の発見」は磁気コンパスの発明が可能にしたとし、これと火薬及び活版印刷をいれて、「ルネサンスを可能にした三大発明」であるとの一般的な認識を示す⁽⁴⁵⁾。すなわち、その後の「17世紀科学革命が、宗教改革と同様、ルネサンスの生み出した一つの結果」であるとし、次のように述べる。

「ルネサンスは、そこから生まれた科学革命や宗教改革同様、あまりに大きな歴史的な出来事であり、幅広い要因から生まれたものであるので、その原因についての正確な記述は不可能である。原因を完全に網羅するためには、ルネサンス史研究を見る限り、まずローマ・カトリック教会といわゆる神聖ローマ帝国が人びとの精神的、物質的生活の秩序として力を失いつつあったこと、その結果都市国家や、地域的あるいは国家的規模の公国が興隆したこと、それに封建領主の行政権が次第に分解していったこと、といった要因を考慮する必要がある。経済的变化は都市の興隆、商業資本の発達、それに金融システムの誕生を促した。ルネサンスまたはヨーロッパの拡大の時期でもある。新世界やヨーロッパの未開拓地の探検がその原因であった。地理的発見は経済的あるいは政治的な権力闘争に影響を及ぼしたほか、ある種の文化的相対主義 ヨーロッパ以外の民族の習俗、習慣、信仰、およびそれらに付随する物質的生活条件は、キリスト教文化と同じくらい文明化されていることがありうるという認識 が生まれるにいった。こうして、「科学革命の起源には、人文主義の改革思想が主要な地位を占めていると言わざるをえない。科学革命の特徴を三つあげるとすれば、それはまず自然的世界の働きを理解するのに数学をもちいること、真理発見のために観察と実験とを行うこと、そして…知識の有用性という考え方を、自然的知識にまで広げる、ということである。どの特徴も知識の世界に根づくには、ルネサンス人文主義が必要であった。ヨーロッパのルネサ

ンスという全般的な変化の中から生まれた特徴であるといってもさしつかえない⁽⁴⁶⁾」と。

同様の認識から、アルフレッド・クロスビーは、『数量化革命 ヨーロッパ覇権をもたらした世界観の誕生』において、ヨーロッパ近代を特徴づけ、世界システム構築を含み、その後のヨーロッパの優位性を決定づけた要因を、世界が時間的にも空間的にも均質であり、従って数学と計測によって検証可能であるとする「世界観」がルネッサンス期に成立したことに求めている⁽⁴⁷⁾。

「西ヨーロッパに有利に作用した要素は、当初は科学とテクノロジーそのものではなく、西ヨーロッパ人の思考様式であったにちがいない。彼らはその思考様式のおかげで、科学とテクノロジーをすみやかに進歩させるとともに、行政・商業・航海術・製造業・軍事の各分野で決定的に重要な諸々の技術をすみやかに修得することができた⁽⁴⁸⁾」とする。その思考様式とは、数学化、数量化そして視覚化とされる。時間に関しては、均等な時間という思考から機械時計が作られ、歴を改革した。空間が均質で計測可能であり数学的に分析できるとの考えから、地図、海図が作製され、さらには天文学が構築された。これらは、いずれも大航海時代を成立させるために必要な要因であったと考えることができる。クロスビーが取り上げた例で特に重要と思われるのは、数量化の思考の実現過程で生まれてきた「計算上でのみ存在する「計算貨幣」という便利な貨幣概念」であり、そして時間概念を帳簿上を含めることが出来るようにした「複式簿記」の開発であろう。近代世界システムを成立させるについて、不可欠の技術であると思われる。

4 むすび

本稿は、平戸を中心とする現在の長崎県北地域におけるキリスト教の受容過程の研究の前提作業の意味もって、布教する側であるヨーロッパの当

時の状況を、主として、その精神史の視点ないしは科学史的な視点から考察してきた。当時のヨーロッパ自体も、ルネサンス人文主義の影響そして宗教改革という変動期をへた時代にあたり、情報革命と呼びうる印刷革命を媒介として、新たな「世界観」をもとに、近代科学的思考が芽生えつつ、近代主権国家の成立を要素とし、それらが相互に関連性を持ちながらヨーロッパ近代が形成されつつある時期であった。これらの諸要素が、地球規模での経済ネットワークの形成過程の中で、同時に、伝わってきていたと言えるかもしれない。これらの、わが国側の影響については、稿を改めて考察することにする。

本稿で考察したヨーロッパ近代の成立過程において、出版の自由が認められ宗教的寛容が保障されていたオランダの果たした役割の大きさも確認された。このようなオランダの影響については - わが国側の平戸についても確認されたが - アーサー・ハーマンの次の指摘は興味深いものがある。ハーマンは、スコットランド人啓蒙思想家が近代の基本理念を生み出し、近代世界の構築に果たした役割を論じた著書において、オランダとの関わりを次のように述べてある。「実際のところ、スコットランド的啓蒙思想の源は、イングランドにあるのと同じ程度にオランダにもあると考えることができる。17世紀の変わり目に、オランダの法律、神学、および医学がスコットランド人の思想家、医者、および法律家を鼓舞教導し、今度は彼らスコットランド人が、次に来る社会の土台を築いたのである。オランダ国王ウィリアム三世はスコットランド諸大学の改革を含む、名誉革命体制を監督し、レンブラントの時代におけるアムステルダム銀行制度と商業資本は、アダム・スミスの時代におけるブリテンの貿易帝国の原型として役立ったのである⁽⁴⁹⁾」。このように、このオランダの影響については、オランダからイギリスへの覇権の移動にも関わって確認されるのである。

この研究は、平成24年度長崎県立大学学長裁量研究費及び平成24 - 25年度科学研究費の助成を受けたものであり、その成果の一部である。

（註）

- (1) 吉居秀樹・山田千香子「キリスト教布教に対抗する「権力正統化装置としての神楽」- 試論的研究」(2012年)（長崎県立大学経済学論集第45巻4号109頁）
- (2) 渡辺正雄『日本人と近代科学 - 西洋への対応と課題 -』（岩波新書 1976年）
- (3) 前掲書，2-3頁
- (4) 前掲書，186頁
- (5) 前掲書，170-171頁
- (6) 前掲書，190-191頁
- (7) 神崎繁・熊野純彦・鈴木泉編『西洋哲学史 - 「ある」の衝撃からはじまる -』（講談社 2011年），3-6頁。
- (8) 前掲書，5-6頁
- (9) ジョン・ヘンリー／東慎一郎訳『一七世紀科学革命』（岩波書店 2005年），35頁
- (10) 神崎繁・熊野純彦・鈴木泉編『西洋哲学史』（講談社 2011年），5-6頁
- (11) （文庫クセジュ）大塚幸男訳（白水社 1992年，2010年）
- (12) 同書解説によれば，この『平家物語抜書』は，「アーネスト・M・サトウ，『日本ヤソ会刊行書誌 1591 - 1610』（1888年，私版）より複写」とされ，幕末期に活躍した外交官であるアーネスト・サトウにより大英博物館へ寄贈された点も印象できである。サトウの蔵書等がイギリスに残された経緯については，萩原延壽『旅立ち 遠い崖 アーネスト・サトウ日記抄 1』（朝日文庫 2007年）が参考になる。
- (13) 『天草版イソボ物語 大英図書館本影印』（勉誠出版 第13版2012年）
- (14) エリック・ド・グロリエ／大塚幸男訳『書物の歴史』（文庫クセジュ）（1992年，10刷2010年，68頁）。ジョゼフ・ギース／フランシス・ギース，栗原泉（訳）『大聖堂・製鉄・水車 - 中世ヨーロッパのテクノロジー -』（講談社学術文庫 2012年），134 - 135頁も参照。朝鮮半島からの活字印刷技術のわが国への継受については，西野嘉章編『歴史の文字 記載・活字・活版』（東京大学総合研究博物館 1996年）第二部を参照。徳川家康が命じて造らせた「駿河版銅製活字」が現存する。
- (15) さしあたり，E.L. アイゼンSTEIN／別宮貞徳（監訳）『印刷革命』（みすず書房 1987年）（Elizabeth L. Eisenstein, *The Printing Revolution in Early*

- Modern Europe (Cambridge U.P. 1983; 2nd ed 2005), 及びアルフレッド・W・クロスビー/小沢千重子(訳)『数量化革命 ヨーロッパ覇権をもたらした世界観の誕生』(紀伊國屋書店 2003年)第11章(Alfred W. Crosby, The Measure of Reality Quantification and Western Society, 1250-1600, 1997)
- (16) 高澤紀恵『主権国家体制の成立』(世界史リブレット29)(山川出版社 1997年)。ベンノ・テシケ『近代国家体系の形成 - ウェストファリアの神話』, 君塚直隆(訳), (櫻井書店 2008年)。小泉徹『宗教改革とその時代』(山川出版社 1996年)。高澤紀恵『主権国家体制の成立』(山川出版社 1997年)。
- (17) 小泉徹『宗教改革とその時代』(山川出版社 1996年), 38-39頁
- (18) 前掲書, 42-43頁
- (19) 加藤節訳『ジョン・ロック 統治二論』(岩波書店 2007年)参照。
- (20) 森田安一『ルターの首引き猫 木版画で読む宗教改革』(山川出版社 1993年), 22-23頁
- (21) 小泉徹, 前掲『宗教改革とその時代』, 2-3頁。
- (22) 森田安一, 前掲『ルターの首引き猫 木版画で読む宗教改革』, 23頁。
- (23) ピーター・バーク/井山弘幸・城戸淳『知識の社会史 知と情報はいかにして商品化したか』(新曜社 2004年)(Peter Burke, A Social History of Knowledge - From Gutenberg To Diderot, 2000, (Polity, 3rd ed 2010), 24頁。
- (24) エリック・ド・グロリエ/大塚幸男訳『書物の歴史』(文庫クセジュ)(10刷 2010年, 76頁)
- (25) 徳善義和『マルティン・ルター ことばに生きた改革者』(岩波新書 2012年)91-92頁
- (26) 世良晃志郎訳『マックス・ウェーバー 支配の社会学』(創文社 昭和15年, 第13刷(昭和52年))。及び阿閉吉男・脇 圭平訳『マックス・ウェーバー 官僚制』(角川文庫 第15刷(昭和48年)参照。
- (27) このことに関わり, 徳善義和も, 前掲『マルティン・ルター』において, 次のように述べる。「ルターのドイツ語の著作は, 書き言葉を通じたメッセージがマスメディア機能を果たした, 歴史上初めてのケースと考えられる。その要因として, 活版印刷の利用があげられる。中世までの書物は, 主として書き写しによるものである。神学や学術の書籍にせよ, 金文字の彩色を施した豪華本にせよ, みな書き写しによって造られていた。修道士の中には書き写しを専門とする書写修道士がいたほどである。書き写しで造られた本はどれも一点物の

ため、非常に貴重で、ごく限られた人しか読むことはできなかった。…その木版印刷に代わる技術として、金細工師グーテンベルクによって発明されたのが活版印刷術であった。ルターの著作は、発明後五〇年以上を経てようやく定着しつつあった、この新技術を用いていた点で、まさに時代の産物ともいえる」（127-128頁）。「…以上は、西欧がローマ・カトリック教会の一体世界から、いくつかの教派が存在する多面的なキリスト教世界に変わったという意味で、いわば『狭い意味』での宗教改革である。それに対して、もっと『広い意味』での宗教改革も考えられる。この時代の西欧では、再形成化はキリスト教だけに起こったわけではなく、社会全体の様々な方面で進み、その結果として中世と近代を画する歴史的転換が起こった。『リフォーメーション』は、そういう広い意味でも理解できる。つまり、それまで歴史の底流をなしていた様々な変革の波が、宗教改革をきっかけに合流し、歴史の大きなうねりとなり、西欧社会の全体を巻き込んで、従来と比べて新しい世界、すなわち近代世界を出現させたということである」（117-118頁）。「…一六世紀初頭は、ヨーロッパにとってもドイツにとっても経済構造の変動期であった。大きくいえば、土地に根ざした農業中心の社会が、貨幣経済にもとづく社会に変化しようとしていた時期である」（120頁）。

- (28) 徳善義和、前掲『マルティン・ルター』、119頁。
- (29) ピーター・パーク、前掲『知識の社会史』、241頁。
- (30) 前掲書、244頁以下。また、パークは、商業と情報との関連について、「ブザンソン、ピアチェンツァ、フランクフルトなどで開かれた国際的な定期市は、商品の交換だけでなく情報の交換の中心地であった。商人の文化は書く文化であったし、それはすでに中世からそうだった。…商売の道は紙の道であり、商売の流れは情報の流れに依存していた。16世紀に、ジェノヴァ、ヴェネチア、フィレンツェなどの商家の人びとが、ヨーロッパやアジアの主要な商業都市から、じぶんの家に書き送った手紙は、まとめれば、実質的に『データバンク』になるほどの量である」（234頁）と指摘する。永積 昭は、オランダ東インド会社（V.O.C）の研究書（『オランダ東インド会社』（講談社学術文庫 2000年））において、人文主義と活字印刷との関係を以下のように述べている。「15世紀中葉にはブルゴーニュ公国が独仏国境からネーデルランドに進出し、外来の征服者のもとで国家統一への気運が次第に芽生えたことは重要である。とくに南部ネーデルランドのフランドル地方には毛織物工業が興り、当時のヨーロッパ

の商業の一大中心地となりつつあった。政治・経済・文化のいずれの分野においても、まず南部ネーデルランドが発達し、それから北部に波及するのが常で、南部では多くの神秘思想家が出たが、北部のロッテルダムに生まれたエラスムスは、この国のみならずヨーロッパ有数のヒューマニスト(人文主義者)であり、15世紀後半から16世紀初めにかけて各地で活躍し、宗教改革の初期には新旧両派から期待をかけられた程であった(49-50頁)。そして、「学芸の発達と共に見逃すことが出来ないのは印刷術の発達であり、北部のハールレムで1423年に金属活字を使った印刷術を発明したラウレンス=ヤンスゾーン=コステルが、有名なグテンベルクより15年早いという説が有力である。ヨーロッパで1500年以前に発行された活字本をインキュナビュラ(incunabula)と呼ぶが、そのうちネーデルランドで発行されたものが全体の訳88パーセントを占めたといわれ、その文運のさかんなことを反映している。したがってこの地方は、政治的には周囲の大国に従属しながらも、やがて飛躍を遂げる要素を十分もっていたものといえることができる」(50頁)。

- (31) ピーター・パーク、前掲『知識の社会史』、246頁以下。
- (32) 前掲書、246-247頁。これらの例として挙げられているのは、イタリア人のイエズス会士マルティエーノ・マルティエーニが中国の地図を印刷してもらうために1653年にアムステルダムを訪れていること、英語の聖書がアムステルダムで印刷され、英国製聖書よりも安くで売られていたこと、17世紀末までイギリスの船乗りが使用していた海図や航海指南書の出版をオランダの出版社に頼っており、自国の海岸線の地図ですらオランダ製であったことなどが示されている。オランダでは、オランダ語、ラテン語、フランス語、英語、ドイツ語だけでなく、ロシア語、イディッシュ語、アルメニア語、グルジア語でも印刷していたとされている。
- (33) 永積 昭、前掲『オランダ東インド会社』、57頁。
- (34) 平戸市教育委員会『平戸 海外に開かれた自由な都市』(シンポジウム報告集)(平成23年))
- (35) ピーター・パーク、前掲『知識の社会史』、第7章 知識を売る 市場と出版：情報とVOC、236-7頁。オランダ東インド会社の情報網については、J. Goody, *The East in the West*, (Cambridge 1996): N. Steensgaard, *The Dutch East India Company as an Institutional Innovation*, 1982(in M. Aymard ed., *Dutch Capitalism and World Capitalism* (Cambridge U.P. 2008), pp.235-57) .

- (36) 前掲書, 238頁。
- (37) 1639年オランダ商館倉庫の復元については, 萩原博文『<改訂版>平戸オランダ商館』(長崎新聞新書 2011年)に詳しい。
- (38) さしあたり, 青木康征『海の道と東西の出会い』(山川出版社 1998年), 村井章介『海から見た戦国日本 列島史から世界史へ』(ちくま新書 1997年)及び村井章介『世界史のなかの戦国日本』(ちくま学芸文庫2012年), 四日市康博『モノから見た海域アジア史 モンゴル~宋元のアジアと日本の交流』(九大アジア叢書)2007年, 桃木至朗編『海域アジア史研究入門』(岩波書店 2008年), 玉木俊明『近代ヨーロッパの誕生 オランダからイギリスへ』(講談社選書メチエ 2009年)。
- (39) 濱下武志「銀の流れでつながれた世界 アジアからの視点」(朝日百科 世界の歴史第7巻 1991年), B-422頁, 青木康征『海の道と東西の出会い』(世界史リブレット25)(山川出版社 1998年)。
- (40) 村井章介, 前掲『世界史のなかの戦国日本』, 17頁。スペインは, 1571年にフィリピン諸島のマニラを建設することによって, アメリカ大陸との太平洋をはさんだガリレオン貿易が開始された。(秋田茂・西村雄志「銀の流れからみた世界史の構築」(秋田茂・西村雄志(編)『デニス・フリン グローバル化と銀』(山川出版社 2010年), 6頁以下。
- (41) 青木康征, 前掲書『海の道と東西の出会い』, 16頁。また, この状況を, アルフレッド・クロスビーは次のように述べている。「西ヨーロッパは慢性的な支払い超過であった支払超過という問題に悩まされていた。金貨は北ヨーロッパから地中海の港に運ばれ, そこから東方の貿易相手に送られた。一四二〇年代にヴェネチアからシリアに送られた金貨は, 一年当たりおよそ五万ドゥカードにのぼった。東方への金の流れは衰えることなく長期にわたって続いたので, スペイン人はこれを『黄金の疎開』と呼んでいた」(101頁)。
- (42) D. フリン/西村雄志(訳)「徳川幕府とスペイン・ハプスブルグ帝国 グローバルな舞台での二つの銀帝国」(秋田茂・西村雄志(編), 前掲『デニス・フリン グローバル化と銀』, 69頁。
- (43) 濱下武志, 前掲論文, 同頁。また村井章介, 前掲『世界史のなかの戦国日本』, 第5章参照。
- (44) 鈴木康子『近世日蘭貿易史の研究』(思文閣 2004年)。鎖国体制になって長崎が主たる貿易港になっても, 貿易の実態が中国貿易があったと指摘するもの

として、羽田正『新しい世界史 地球市民のための構想』(岩波新書 2011年), 181-182頁参照。

(45) ジョン・ヘンリー / 東 慎一郎訳『一七世紀科学革命』(岩波書店 2005年), 12-13頁。

(46) 前掲書, 17頁

(47) アルフレッド・W・クロスビー / 小沢千重子(訳)(紀伊國屋書店 2003年), 32-33頁))そして、このことを「西ヨーロッパ人はついに数学と計測を結合させ、これらを応用して、感覚的に認知できる現実世界を解釈するようになった。これは西ヨーロッパ社会が達成した比類なき知的業績である」とする。

(48) 前掲書, 9頁。

(49) アーサー・ハーマン / 篠原久 監訳・森田道夫訳『近代を創ったスコットランド人 啓蒙思想のグローバルな展開』(昭和堂 2012年), xi 頁。